

2022 年度 日本社会心理学会「若手研究者奨励賞」選考経過と選考結果

2022 年度の「若手研究者奨励賞」の選考過程と選考結果をご報告申し上げます。13 件の応募があり、4 名の選考委員による厳正な採点と審査の結果、以下の 8 名を受賞者と決定いたしました。選考委員の先生方に講評をいただきましたので、あわせてご覧ください。

「若手研究者奨励賞」選考委員長 工藤恵理子

受賞者（応募順 所属学年は応募時のもの）

田中 里奈 (たなか りな)	内受容感覚と内受容意識に及ぼす文化の影響とその説明要因の検討	名古屋大学大学院 博士前期課程 2 年
菅沼 秀蔵 (すがぬま ひでぞう)	我々は先人からどう学ぶのか —情報探索場面における系列的な社会学習の検討—	東京大学大学院 修士課程 1 年
藤川 真子 (ふじかわ まこ)	情報獲得において多数派の行動を過剰に模倣することは適応的なのか?: 多数派同調バイアスの実験的検討	広島修道大学大学院 博士前期課程 2 年
棗田 みな美 (なつめだ みなみ)	社会的ジレンマ状況における多数派同調バイアスの適応的意義	広島修道大学大学院 博士前期課程 1 年
比留間 圭輔 (ひるま けいすけ)	日本人が相互独立的な人を選好するとき	青山学院大学大学院 博士前期課程 1 年
奥山 智天 (おくやま ともたか)	社会経済的地位と幸福観: 「小さな幸せ」は主観的幸福感の社会経済的格差を緩和するのか	一橋大学大学院 修士課程 1 年
大坪 快 (おおつぼ かい)	兵役拒否者はなぜ非難されるのか?: 集団間紛争場面において紛争に参加しない個人の評判を低下させる要因の検討	九州大学大学院 修士課程 1 年
上田 寛 (うえだ ひろし)	アスリーートのメンタルヘルス改善に向けた心理的安全性の効果検証	広島大学大学院 博士課程前期 1 年

## 「選考過程」

6月29日に募集開始をホームページで告知し、メールニュースでも会員に告知した。締め切りは例年通り9月30日とした。

### 2) 選考委員選出と一次審査

応募総数13件に対し一次審査を行った。選考委員は応募書類に記載された指導教員を除いて、理事から2名、一般会員から2名に依頼した。

選考委員（敬称略）

理事より：田中知恵（明治学院大学）、新谷優（法政大学）

一般会員より：竹橋洋毅（奈良女子大学）、谷田林士（大正大学）

審査方法については、従来の手順を踏襲し、この時点では選考委員は互いに匿名で審査をおこなった。各応募に対して、A（優れている）、B（普通）、C（やや劣っている）を付与するものであった。なお、A評価は各委員6本以内とした。また、1名の選考委員から1件の応募に対して、利害関係の申告があり、その応募について当該選考委員は審査に加わらなかった。

### 3) 第二次審査

第一次審査結果について従来の得点換算方法に従い、A評価を40点、B評価を10点、C評価を5点とし、各応募について合計得点を算出し、その後メールでの審議を行った。最終的に、応募総数は多くはなかったものの、優れた研究計画が多かったことを踏まえ、8件の応募を受賞対象とすることで合意し、常任理事会と理事会に推薦した。

以上

2022年度「若手研究者奨励賞」選考委員4名による講評（お名前の五十音順）

#### 竹橋洋毅（奈良女子大学）

若手研究者奨励賞の審査という、学会の未来を担う若手の先生方の研究にふれる機会をいただき、光栄です。ご応募いただきましたご研究はいずれも興味深く、ぜひ推進いただけたらと思いました。

研究を評価する観点は理論的価値や実現可能性がまず挙げられると思いますが、近年では再現可能性や一般化可能性、好ましい研究実践も重視されています。また、社会心理学が価値ある営みとして世の中から求められるためには実社会の問題解決に資するという観点も重要だと思います。Lewinの言うように、良い理論は実際に役立ちますし、そうした視点は大切でしょう。そして、心理学は具体と抽象を行き来する点で優れる学問であり、対象とする「現象」へのまなざしの鋭さや面白さも重要だと考えられます。採択され

た研究計画は、これらを高度に満たしていたと思います。

この賞は、若手の先生を応援するためのものです。今後も多くの方にご応募いただけましたら幸いに存じます。

#### 田中知恵先生（明治学院大学）

いずれの申請においても意欲的な研究計画が立案されていました。ただし申請書のスペースは小さいため、研究のおもしろさを明瞭に説明いただくことが重要だと思います。

第一次審査においては、各申請に対し私はまず次の5点を確認しました。研究タイトルが研究計画に合ったものか、研究で扱う概念の定義が明確になされているか、研究実施の実現可能性が高いか、予測される結果が明示されているか、研究成果がその領域の進展や社会貢献にどのように役立つのか論じられているか、ということです。そして、上記の点が満たされかつ独自の研究視点がアピールされていると思われた場合に「A」、独自の研究視点は示されているけれども問題等で説明が不足していると思われた場合に「B」、問題の書き方や計画を見直すともっと良くなると思われた場合に「C」としました。

今回採択とならなかった申請も、少しの見直しで説得的な研究計画書になると思います。審査結果はそれぞれの研究の価値に対する評価ではありません。すべての研究が進められ、新しい知見の発見につながることを願っています。

#### 谷田林士先生（大正大学）

初めて奨励賞の選考に携わる機会をいただきました。私で務まるのかと自問しましたが、遠く昔に奨励賞を受けて芽生えた自信が、研究を継続する契機の一つとなっていますので、恩恵者として審査を担当させていただきました。応募件数の減少が続いていますが、修士（前期博士）課程の院生からの応募が多く、そして、その若い研究者の受賞が大半を占めていることは喜ばしいことだと思います。今回の受賞を励みに博士号取得や研究者を目指して欲しいと願います。惜しくも選考外となった応募者の研究計画も、独創性に富み、魅力的な研究がありました。どの点が合否を分けたのでしょうか？歴代の選考委員（もちろん今年度も含めて）の先生方の講評にヒントがあります。計画書の指南書のような講評を分析し、次年度の奨励賞に是非チャレンジしてください。今回の審査では、サンプルサイズを設計した研究計画の「実現性」の評価に頭を悩ませました。研究の規模が大きくなる傾向があるため、実現性を担保する工夫を記述する必要があると感じました。

#### 新谷優先生（法政大学）

研究が優れているかどうかの基準で分かりやすいのは、研究計画がしっかり練られていて、仮説の検証が可能であるかです。この点については、ある程度客観的に判断できるものだと思います。しかし、研究計画がしっかりしていることは、優れた研究の必要条件であっても、十分条件ではありません。その研究が必要であること、さらに理論的・社会的に大きな貢献が見込めることが、優れた研究と良い研究を分けるように思います。これを説得力ある文章で訴えてくる申請書は間違いなく高評価となります。しかし、申請書の中にはこれらを行間から読み取らなければならないものもありました。その場合、審査者個々人の価値観や信念によって、評価が分かれてしまったように思います。さらに「面白

い研究」となると、私は研究の将来性も重要だと考えます。仮説通りの結果にならなくても、そこから次の研究に発展しそうな研究は、わくわくします。若手研究者奨励賞に相応しいと思い、高く評価しました。

以上